

石油需要予測の“クセ”を知る

やや弱気なOPEC。過去を引きずりがちなIEAとDOE/EIA。期先予測には粘着性

日本エネルギー経済研究所 計量分析ユニット 需給分析・予測グループ 研究主幹 柳澤 明

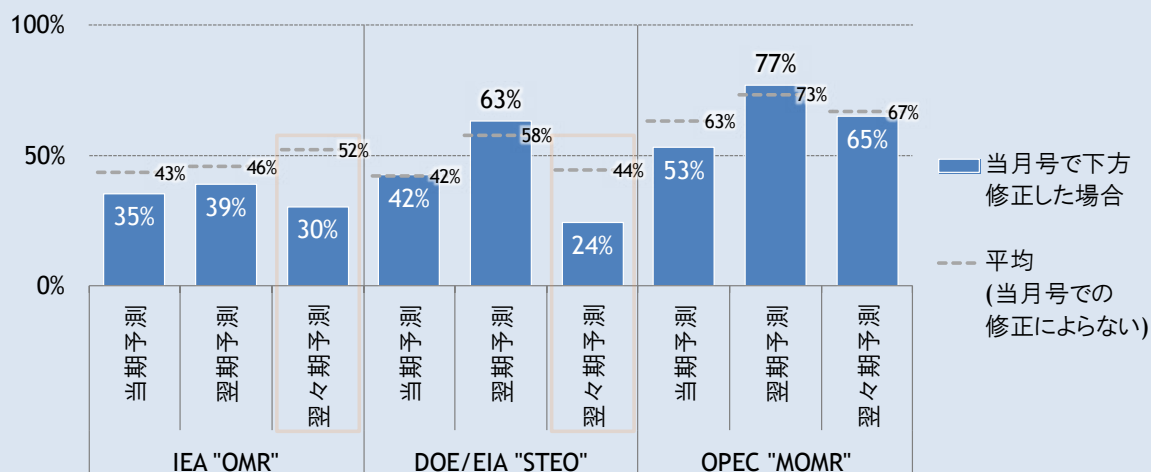
要旨

原油が値を下げている。2014年10月7日の国際通貨基金の経済予測引き下げに続き、同14日に国際エネルギー機関(IEA)が石油需要予測を下方修正したことで、原油価格の軟化傾向が鮮明になったとされる。そうした文脈では、石油需要予測の修正はその量と並んで方向性が重要な意味を持っている。本稿では、代表的な短期世界石油需要予測であるIEAの“Oil Market Report”、米国エネルギー省 エネルギー情報局(DOE/EIA)の“Short-Term Energy Outlook”、石油輸出国機構(OPEC)の“Monthly Oil Market Report”の石油需要予測を対象に、それらの“クセ”を明らかにすることを試みた。

3機関の予測とも、修正量の期待値はほぼ0 kb/dであり、平均的にはバイアスはかかっていると解釈できる。しかし、IEAとDOE/EIAの当期予測修正の最頻値階級は下方修正、OPECは上方修正と異なっている。すなわち、IEAとDOE/EIAはその特徴として予測を高めに出しその後に引き下げ、片や、OPECは控えめな予測を後に引き上げるのが最も典型的なパターンということになる。

IEAおよびDOE/EIAの翌々期予測においては、当月号で上方修正した場合、翌月号でも上方修正する確率が高まる。逆に、下方修正の後にこれを相殺・減殺する形で上方修正を行う確率は低い。IEAが上方修正に転じるのは3回に1回もない。DOE/EIAにいたっては、下方修正の翌月号で上方修正する確率は24%まで低下する。すなわち、これらの予測修正では同一方向の修正が続きがちなという正の自己相関がうかがわれる。

図 | 当月号で石油需要予測を下方修正した場合に翌月号予測で上方修正する確率



期先の予測は難しく、ゆえに予測修正量は大きくなりがちであると一般に想像される。しかしながら、3機関とも—IEAとDOE/EIAの翌々期予測の修正には自己相関がうかがわれるにもかかわらず—修正量の標準偏差は予測期が期先になるにつれて逆に小さくなってゆく。こうした背景には、石油需要(予測)を左右する経済規模、気温、エネルギー価格などの要因の想定において、その見直しが期先になるほど小さくなっていることが考えられる。

キーワード: 石油需要予測、IEA、DOE/EIA、OPEC

お問い合わせ: report@tky.ieej.or.jp